

平成27年度愛知県がんセンター公開講座(第4回)のご案内

「がん研究最前線～個別化医療の実現に向かって～」

= 平成27年9月5日(土)開催 =

〈 講師からのメッセージ 〉

「すい臓がんの臨床研究と実践」

膵がんは診断時には既に進行し手術が困難なことが多く、一方でこれまでは有効な化学療法が少なく難治がんの代表です。乳がんや肺がんのようにがんの遺伝子異常に基づいた個別化治療の実現には至っていませんが、最近では化学療法が着実に進歩して治療成績は向上しています。膵がんの中には「神経内分泌腫瘍」などの特殊な膵がんがあり、選択する薬剤は通常膵がんとは異なります。CT などの画像検査では通常膵がんとの鑑別が困難なことが多く、適切な治療選択のためにも生検による正確な診断は不可欠です。本講座では、超音波内視鏡を用いた生検診断と最近の化学療法の進歩と実践について講演します。

消化器内科部 医長 水野 伸匡

「進化したがんの放射線治療」

120年ほどの歴史を有する放射線治療ですが、近年の技術革新により急激な進化を遂げてきています。人類史上初めて発見された放射線は X 線であり、現代においても診断や治療において中心的な役割を担っています。放射線治療においては装置の進歩やコンピュータの進歩によりかつては不可能であったような非常に複雑な照射が実現できるようになり急速に普及してきています。粒子線のような特殊な放射線も生産コストの低減などもあり徐々に設置台数が増加してきています。今回はこのような最新の放射線治療や近い将来の展望についてお話しさせて頂こうと思います。

放射線治療部 医長 立花 弘之

「がん免疫療法～最近の進展について～」

がん免疫治療は、BCG、ピシバニール、クレスチンなどの非特異的がん免疫療法、がんワクチンや樹状細胞療法などの特異的免疫療法を経て、新たな時代に入りつつあります。

現在、最も期待されているチェックポイント解除療法は、がんを攻撃するキラーT細胞にかけられたブレーキを外す治療です。悪性黒色腫、扁平上皮性肺がん、ホジキンリンパ腫などの患者さんの一部に著明な効果があることが報告されました。長期間再発の無い症例もあり、明るい光が差し込んだ感があります。講演では、がん免疫療法の歴史を振り返りつつ、現在から未来への展望を述べたいと思います。

腫瘍免疫学部 部長 葛島 清隆

「がんの弱みを叩く分子標的研究とは」

がん細胞だけを攻撃して正常な細胞には作用しない薬が、副作用のない理想の抗がん剤です。そのためには、がん細胞だけが持っている特別な性質を標的にする必要があります。様々な研究によって、がん細胞のなかには、細胞の増殖や浸潤にかかわる特定の分子の働きが活発になっているものがあることがわかってきました。分子標的薬はそのような分子にだけ作用し、がん細胞をピンポイントで攻撃することを狙った薬です。本講座では、分子標的薬が作用する仕組みや、新たな分子標的薬開発に向けた研究についてお話しします。

感染腫瘍学部 部長 小根山 千歳

「がんセンター研究所のミッション」

研究所は、①がんの疫学・予防研究、②診断・治療に関する研究、③発がん制御に関する研究と、大きく3つの領域で研究活動を行っています。現在、国内外の多くの大学や研究機関と幅広く共同研究を推進するとともに、名大・名市大の連携大学院として教育にも大きな力を注いでいます。がんの研究は、基礎的な研究、トランスレーショナル研究、臨床研究と大別されますが、基礎研究で見つかった知見を新たな予防法、診断法、そして治療法に展開することが極めて重要です。研究所は、中央病院とともに当センターの両輪として、がん患者・家族の方々に貢献できるような研究成果を発表していきたいと考えています。

研究所副所長（兼分子腫瘍学部 部長） 関戸 好孝